

# 渡辺よしたかの戦後詠（1946～1951）をめぐって — 歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（下）その1 —

野口 周一<sup>a</sup><sup>a</sup> 湘北短期大学

## 【キーワード】

台湾 引揚げ 『あぢさゐ』復刊 新高山 大関山 合歓奇萊山

## はじめに

愈々、渡辺よしたかの戦後詠を取り上げていくことにする。

その際の資料は、復刊された『あぢさゐ』が中心となる。それを3～5回ほどに分けて論じていく予定である。その事由は、よしたかが『碧き湖』（あぢさゐ社、1964年）を刊行した際、『八重雲』刊行後の約十五年間ほどの作品は、作歌意識の不徹底を感じ一切採らず、三十巻から三十七巻末までの『あぢさゐ』誌上発表作から選出した」（206頁）と記されていることによる。よしたか自身、30巻（1955年〈昭和30〉）を境として、その前後により一線を画しているのである。

しかし、論点が多数あり、『あぢさゐ』の残存状況<sup>(1)</sup>という問題点もあるので、本稿は1951年（昭和26）までを対象としたい。また、ことに台湾との連続性を中心に考察を進めていく。

なお、今までに発表した渡辺よしたか関係の論文は、次の4編である。

- ①「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（上）」

<連絡先>

野口 周一 [noguchi@shohoku.ac.jp](mailto:noguchi@shohoku.ac.jp)

『湘北紀要』第30号、2009年）

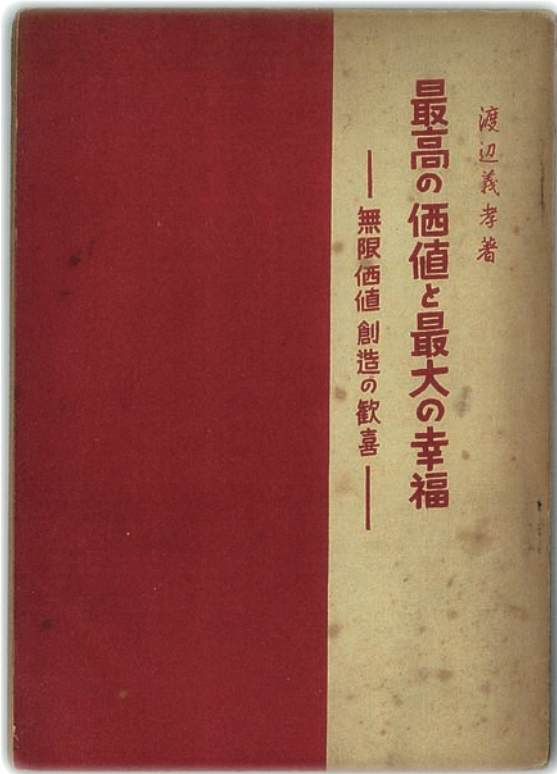
- ②「歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（中）—その1—」（『湘北紀要』第31号、2010年）  
 ③「渡辺よしたかの戦争詠をめぐって—歌人「渡辺よしたか」の生涯と作品（中）その2—」（『湘北紀要』第32号、2011年）  
 ④「君がため秋白日の香炷かむ—花蓮港街に生きた渡辺よしたか・みどり夫妻—」（『人物研究』第28号、近代人物研究会、2011年）

以下、論旨の関係上、上掲論文を引用する際は、①を本編（上）、②を本編（中）—その1—、③を本編（中）—その2—、④を付編、と順次略称する。

## 1. 引き揚げ後の状況

さて、よしたかは1946年（昭和21）4月、台湾から日本へ引き揚げ、妻・次子の郷里である群馬県北甘楽郡小野村（現在：群馬県富岡市）に居を定めた。その引き揚げの状況については、本編（上）において述べた通りである。

引き揚げ後、よしたかの動向は『最高の価値と最大の幸福—無限価値創造の歓喜—』（あぢさゐ社、1944年）から再現できる【図版1】。ここには群馬県に到った事由と住居についての記述があ



【図版1】

る。よしたかは、「僕は父の代から海外に立って来て郷里には何の手がかりも縁者もないので妻の郷里に身を寄せた。妻の伯母にあたる人のがらんとした農家の一室を借り受けたのであったが、先方が寄食者を迎へたような不安を覚えてはと思ひ、三ヶ月分位の室代を支払ひわれわれは手不足のその一家のため馴れぬ農耕や家事の手助けなどもし経済的には一文の損失もかけぬように心がけたのであったが二た月ほどして、一日も早く出てもらひ度いと宣告を受けたので僕たちはその日の中に一家六人が旅館の一室をかりて住んだが、その旅館でも二、三週間の約束ではなかったかといって、一日も永くては困るといふのである。僕たちは致しかたなくまたそこを出てあてどがないので、到底人間の住むべき構造ではないお寺の堂にしばらく住んだ。ところが伯母の家の場合も、旅

館の場合も部屋が不足客が立てこんで困るといふわけではなく旅館でも規定の料金は支払ってをり、そこに置いて貰うための余分な心づかいをして身をせばめ小さくなってゐたのである」と述べている（「島国根性」87-88頁）。

このような状況を活写している事例を、私は寡聞にして知らないのであるが、2例のみ思い出したので紹介したい。まず、帯木蓬生はその著『逃亡』（新潮社〈文庫版〉、2000年）において、「納屋の二階建の瓦葺きで、一階に農機具と藁束が納められ、隅に便所と、簡単な流しがついている。叔母は、手すりつきの階段を先に立って昇った。二階は十畳くらいの広さだろうか。板張りの上に莫塵が敷いてある。赤土壁が露出していた。南側には半間四方の窓があり、ガラス戸の一部は油紙で修理されている。北側の小窓は、板戸を押し上げて開閉する仕組みになっていた」とある（新潮文庫版(上) 466-467頁）。これは親戚の農家の納屋の二階を借り受けた例である。

また、『あぢさゐ』の会員である植村蘭花（義隆）が、熊本市内に住居を構えた例がある。これは蘭花が急逝し、その追悼号に島本英夫の「蘭花と敗戦」があり、そのなかの記述である。同号の「後記」において、よしたかは「旧あらたまの会員で、植村氏を知る島本英夫」と紹介する。さて、「植村蘭花略歴」によると、蘭花は「昭和二十一年四月 帰還熊本市河原町ニテ大衆食堂経営」とあり、そのための食堂となった家屋である。蘭花は島本とともに、屋台を出すために「二軒続き」を手に入れたものの、そこは3人で満員となるスペースで、当然のことながらそこでの起居は望むべくもなかった。しかし、「半年も経つと小金の余裕も出来たので、板やサンガマチを一枚二枚と買溜め、それに古材を方々から拾って来て、蘭花氏は屋台を二階作りに改造して、借家を引払い、其処に生活の基地を定めることとなった。二階と言ふ

ても、勿論天井裏で、鳩小舎に類する物であった。通路に面した方の二階の壁に、二尺平方の窓を切り、そこから蘭花親子が、小鳥のように首を並べて、道行く人を見下して居た」と島本は記している（『あぢさゐ』第29巻6月号）。街場であっても、そのような住宅状況であった。

よしたかの場合は、田園地帯であるから、前者に近いであろうが、親戚でさえも快く貸しながらない心情が描かれている<sup>(2)</sup>。

引き揚げで失ったものは多い。一例であるが、よしたかは「夢」と題して、

いくそたび夢みることぞ置きて来し書籍ことごとく返りたる夢  
物欲の妄執のみにもあらざらむよみ度き本が無きは虚しも  
国語大辞典美術書などの大冊を手にとりあげて泣きて目ざめつ  
物に執するは次子よりわが未練にて蔵書目録持ち帰りたり  
夢と言へば天皇皇后をたびまねく夢みる思想の残滓<sup>かす</sup>か未練か  
学浅きを擬装せんとにもあらざらめ金文字の背革並ぶゆたけさ

と、その無念さを詠う（『あぢさゐ』第26巻7月号）。よしたかは、9歳で台湾に渡り、各地を転々としながら、歌を作り自己を磨き上げてきた（本編（上）参照）。その知見の背景となったものは、歌友との議論であり、膨大な読書量であったろう。「金文字の背革並ぶゆたけさ」にその思いを見る。

## 2. 『あぢさゐ』復刊

よしたかは、『あぢさゐ』復刊を「旧来のあぢさゐ会員にかぎり配布した会報所報のごとく、復活再刊の本号を第二十二年五月号」とする旨、記している（「後記」『あぢさゐ』第23年5月号）。ここ

に記されている『会報』も存在したようであるが、それは現在のところ発見できていない。

### (1) 『あぢさゐ』第二十二年五月号（昭和23年4月5日発行）

1942年（昭和18）に廃刊となった『あぢさゐ』の復刊である。表紙の誌名の下巻頭言は、「詩美にふるるところこそ、すべての精神行為のもっとも至純なる焦点であり、すべての善きものすべての真なるものを創る根底をなすものである」と説き起こされ、その後、当時の世相が述べられ、最後は「歌によるもの、この精神行動の最先頭に立ち、日本文化再建と民族精神の浄化を願ひ同時に世界人類文化創造への使命と光栄を自覚して低劣俗悪の濁流を乗り越え清純高邁な理想の顕現へ勇躍すべきである」と、復刊の使命が高らかに宣されている。

本誌は10頁の小冊子であり、「あぢさゐ作品一」（2～4頁）によしたかの歌17首があげられている。

あかときと月ごりゆき物欲に狂乱の世をはるかにぞしつ（暁天）  
弦月は怨むるごとくかたむきて早あけがたの風ぞざわめく  
邃々と浄瑠璃のいろ凍てはてて弦月かしぐあかつきの空  
生きてわが益なき世ぞと児をなげく歎き断つべくいごる月かけ  
ありありと星座読まるるあかつきの無窮の空に適くばかりなり  
すべからく現れては消ゆる現像にとどこほらめやあかつきの空  
悔いならぬ熱きなみだは月かげのいのちに徹る聖きたまゆら  
凍て果てし月のひかりに曝さるる死滅の淵を望む風景

神棚の塵は心のちりといふことわざ年月ひさに味はふ（寵居）  
 隣近所にさかき代りのものもなしあたかも深き冬枯にして  
 天照皇大神とぞ書きまいらせいかにも拙しわきて楷書は  
 お礼さへくばらぬ世とぞなりにける世のうつろひをあげつらふまじ  
 たたかひに勝てよと祈りたりしものふりかへりみることもせなくに  
 さかき代りのお水時おりかゆるのみこの簡素さをひとり慎む  
 この庭に居つくものかも三日ほど笹鳴ききて姿見かけつ（閑庭）  
 掃きだめに何の求むべきものやあるそこにおりゐて笹鳴きもせぬ  
 寒に入る庭にひそかにうごめきて驚るるはあはれ極まる

その他、西川三来生、南城英樹、門馬経祐、瓜生英彦、植村義隆の歌が掲載されている。この5人も花蓮港以来の仲間たちである。ここには台湾を詠ったものはない。

次に「錦花集」（5～6頁）が設けられ、春田操、春田松子、小林土志朗、川見駒太郎、齋藤勇（掲載順）、すなわち客員の歌が寄せられている。

このうち小林、川上、齋藤については、孤蓬万里が『台湾万葉集』物語』において簡単に言及している。ことに川上については、「筆者の台北二中時代の国語科の恩師」であり、「筆者を歌人として育てあげ」たとして、「台湾短歌の歩み」の冒頭において、まず恩師の歌5首の紹介から始めているのである。孤蓬の恩師への心情は、1959年（昭和34）に「卒中に倒れて半身不随になられてから」、1982年（昭和52）に他界するまでの間、「海をへだてているのでその療養中五回しか見舞に行けなかったのが遺憾である」という一文から十分に理

解できる。

小林は『南台短歌』を1943年（昭和18）に創刊、「高雄中学教頭、台南一女校長を経て、台北四中の初代校長になっている」、『南台短歌』の小林は『新生短歌』と改称して仙台でつづけたが、一九六九年他界」とある。また齋藤は1940年（昭和15）に『台湾』を創刊し、よしたかの『あぢさゐ』はそれに合流したのであった。齋藤は「淡水中学と台北師範の国文科教師をつとめ」ていた。

よしたかは『あぢさゐ』復刊にあたり、台湾時代の交友と情誼を活かし、彼らの歌を復刊号の中心に据えたのであった。そこで、台湾について詠まれた歌は、春田操の「帰還途上」であり、「乏しき引揚荷の中に玉光る小石も持てり棄て難くして」、「老いすれば術なく思ふこの海をふたたび越えむ吾ならなくに」他3首を詠う。

「五月集」（7～9頁）には中本久雄、飯正樹、合屋公子、高松恭二、愛甲公、小林はな江、吉川京子、矢口千枝子、大岡与吉、大岡みつ子、渡辺次子の11名が詠んでいる。高松に「台湾にとはに別れし引揚のかの日本語れば涙ぐむ吾子」、小林に「年うつり十たびの春はめぐれども君去りし日のかなしかりけり」、大岡みつ子に「愚かにも似たり幾度か空襲に会いはて焼き出され引揚げて盗難にあふ」、「ゆくりなく送りましたまひし会報に内職の手をとめむさぼりて読む」とあり、引き揚げの苦難、夫を喪った悲しみなどが詠われている。よしたかの妻・次子は「落葉せるあかはや木立寒々し亡き子思ひつ吊橋渡る」、「庭すまの雑木の新芽見えそめて吾子の入学間近なりけり」と詠い、亡き子・あやめを偲び、二女・もみぢの入学を心待ちにするのである。

「復刊辞」（9頁）は、よしたかの歌3首、

ちんぴらが俺の彼女にならんかとほざけり  
 ちんぴら切りて喰ひつ

人間がごみの如くに地下道に掃き落されてい

まだ生きをり

ひとよさは千五百円とふ肉塊がまたおいでね  
と言ふ赤き唇

から始まる。「人間がごみの如くに」とあるように、例えば糸賀一雄は「目の前にいる敗戦国の不幸な子どもたち——終戦直後、横浜で目撃した浮浪児狩り（狩りとは一体何事だ！）の姿が目にかぶ」と述べている（『復刊 この子らを世の光に一近江学園二十年の願い—』日本放送出版協会、2003年、12頁）。当時の世相は、俳人・金子兜太の「敗戦直後の日本人は徹底して自分勝手な面が強かったし、他人に対して極めて荒っぽかった」という言の通りであった（「言わずに死ぬるか！日本人よ」『週刊ポスト』2012年1月13/20日号、小学館）。

そして、よしたかは「これは私が色紙を売り歩きつつ書きとめた歌だが、このように混乱し疲へいし果てた日本の世相がどうなってゆくであろうか」と悲嘆しつつも、「しかし私はこのような現状に決して失望しないのである。日本は決してこのまま亡びはしない」、「いつの時代にもあるように再出発再吟味をして出直しを必要とする場合には」、「たとへば歌の如きにしても、文学としての価値のないものだとか、短歌は滅亡する外ないとか」、「われわれ民族の今までに残した一切の文化的芸術的作品をさへ廃業してしまへといふような徒輩がある」と記す。後者の端的な例が、桑原武雄の「第二芸術 現代俳句」（『世界』1946年11月号）であり、ここから短歌も私小説も第二芸術かという声が澎湃と起こったのである。

さらに、よしたかは、

何もかも履きちがえたる奴ばかり男に食って  
かかる小娘

をあげ、「われわれの善いものと悪いものもすべて混同して冷静透徹した判断によって再出発をしなくてはならぬ」と述べる。さらに、「私は日本に帰っていくつかの短歌の団体を作っていささかで

も日本の精神文化再建への貢献を希ってやってみたが駄目であった。短歌を通じてこのような文化再建をするにはどうしてもやはり雑誌を刊行してゆかねば不徹底である」、「日本人が日本人としての精神的発展をするためにはその基調として詩美にふるる心をもって個々の人間性を高めてゆくことの外には道なく、あぢさゐ復活刊行の理由と意義はここにあり」と高らかに宣するのである。

その熱い思いは、26年1月号の「新春雑記」には「一般はあはれむべし、浪花節とダンスと競輪がいいのである。日本人の大多数が、人間性がこんなにも低くてどうなるのだろう」、「人間性を高めるものは何だ、芸術だ。よい芸術をもって人間性を高めなくてはならない。この外に人間性を高める方法はない」と表れ、巻末の「年頭第一信」には「もう少し生活が楽になったら歌が作れるんだが、どうにも食ふことに追はれて歌どころではありません、と君は言ふ」、「生きる苦しみがないところに生きた歌は生れて来るはずがない」、「食ひかねるような生活だからこそ、一層歌が必要なのだと僕は思ふ」、「生活戦にも僕らは敗けてはならないのだ。いかなる場合でも勇者でなければならぬ。美しい完全な社会の中だけの聖者であり勇者であつてもつまらない。汚穢溷濁の中にも毅然としてこれを切り抜けてゆくその場に応じた叡智をもたぬ事を愧ぢ努力し一道専修によって一切を突破してゆく勇者たらんことを努めようではないか」とほとぼり出ている。

「後記」（10頁）は、「旧来のあぢさゐ会員にかぎり配布した会報所報のごとく、復活再刊の本号を第二十二年五月号としてお届けする」に始まり、「あぢさゐ復活を衷心喜び祝福して、いち早く原稿を賜った春田博士ご夫妻、齋藤、小林、川見諸先生の愛情は一道専修の道につながる者にもみ与へられた美しい友情でまことにかたじけなくない限りである」と謝意を示す。しかし、「あぢさ

る会員で居所判明のものに対し本号はとりあへずお届けするが、食ふための奔命もさること乍ら作品を寄せぬものには一切送本せぬ。また作品送稿の意志も気力もない者はこの際除名する」と激しい言葉を吐く。

ここで、付言したいことがある。それはよしたかが「色紙を売り歩き」と語っている個所についてである。三女・中島しぐれによると、よしたかの後半生は色紙を売り歩くことにより糊口を凌ぐ、まさに清貧に安んじて作歌活動に精進したのである。それゆえに、まさに短歌道に精進しない者に対して、激しい言辞となって噴出するのである。

最後に、今後の態勢として「誌上をもって左記の諸氏にその地方の支部長をお願いする」として、熊本は西川三来生と植村義隆、宮崎は関昌寿、広島は前塚利正、山口は合屋公子、人吉は愛甲公、神戸は平井三恭、新潟は阿部烏秋、千葉は松下久一、長野は渡辺巖、以上12名を掲げている。これらの人々は復活再生の『あぢさゐ』の大黒柱と目されたわけである。

なお、色紙に関わる歌は、本稿で対象とする『あぢさゐ』第26巻にも掲載されている。2月号には「和歌山旅宿パークサイドにて」と題して、

つれ込みの客たて混みて女中部屋に逃れかき  
つぐ描きかけの色紙

入れ替りまた立ち代りつれ込みの客混む中に  
夜々色紙かく

とあり、また

夜々酒と女に痴るる客の中に関わりもなく色  
紙かきつぐ

と、当時の世相とともに作歌している。

## (2) 『あぢさゐ』第二十二年六月号

復刊第2号である。「巻頭言」において、「統覚」という精神作用から説き起こし、「あらゆる感性

を通し、または観照をとほして自我の中に純化されるのはこの統覚であって、この作用が鍛錬されゆくのは詩美にふるる感性が基因となるのであって、詩美にふるることなくしては統覚作用はうながされないしこれを表現へみちびくことは全く不可能なのである」と詩歌論を展開していく。さらに、「精神は永遠に清新そのものでなくてはならず生命も永遠に清新であることがその本質でこれを高めてゆくものは不断に美を感受する生きかたに努力しこれを統覚によって自我へ純化せしめることを努めねばならない」と述べている。

「あぢさゐ作品 一」(2～6頁)には春田操、瓜生英彦、門馬つねすけ、西川三来生、春田松子、川見駒太郎、大対寅助、よしたかの順で並ぶ。つねすけに「引揚最初の墓参」9首がある。2首をあげる、「たらちねの実母の御墓にまうづるを継母だちに告げず出で来し」、「明日よりの生業定めぬ身となりて母の墓前に立つと思へや」。

さて、よしたかは「春愁」と題した18首を載せる。

おもひでははるかにおぼろ夜のほの青白き木蓮の花

かぎろひのほのかにうかむおもかげも夢うつ  
つなる木蓮の花

いのちなげうちつらぬかむと必死さへあなあ  
あはれあはれすぎにし

日ぶみ夜ぶみ書きつつづけたる情炎もあなあ  
あはれあはれすぎにし

あけほの藤むらさきに朝月の消えぎえにし  
てにほふまみはも

断崖のま下は南支那海のまぎらはしさに唇ふ  
りにけり

すずやかにはずめる声よ手を取りて断崖の上  
を跳びかけるなり

花あふちにほひよどめる台南の紺青の夜の濃  
きおもひかな

花あふちにほふおそ春台湾の旧都台南に残る  
おもひや  
ひとよさをふすまへだてし怨めしの思ひをこ  
むる熱きくちづけ  
抱かれしさまがピアノに映るゆへやさしとて  
尚顔をうづめつ  
何がなしやさしく仕へたけれどもするすべな  
しといふかごとはや  
君がためするうれしさとはんかちを湯どのに  
すすぐ旅のやどりに  
若き詩人と高官夫人の恋などと書き立てられ  
し罪もはるけし  
ふれみつ身もだえて泣く相へだつ肉体越え  
むなげきなりけり  
泣く泣くに許してよとてこばみゐしすべては  
ここになげいだされつ  
身をしのび質屋がよひも敢てしていかに切な  
き逢瀬なりけむ  
むらさきのささなぎの花あえかにも高貴にあ  
でにしほみけらずや

よしたかは、本号の「後記」に「春愁一連の作は  
亡き岩満千恵との恋愛事件である。生きあえぐ現  
相の中にこうした抒情も時にとって清涼剤であら  
う」とし、前掲『最高の価値と最大の幸福』におい  
ては、その顛末を「雑誌の援助者である某子爵の  
息女であり、高官夫人であった千恵という女性と  
恋愛をした。これは明らかにはげしい熱烈な恋愛  
であったが、ついに逃走を企てて僕のある友人へ  
の告白から、追手がかかって彼女は監禁されツイ  
ニカンキンサルカナシチエの一本の電報と共に永  
遠の別離となり、それから約十年彼女は夫の許に  
帰り、大連で病死したといふことを改造社版新万  
葉集の作者経歴によってはじめて僕は知ったので  
あった」（112頁）と書き記している。

私は、よしたかと別れた後の千恵の半生を、千  
恵の歌の発掘により明らかにした（本編（中）－

その1－、参照）。よしたかは、その3年後にも土  
佐路を歩きつつ、

花あふち暖国土佐にほふ時岩満千恵をまた  
思ふなり

と詠う（『あぢさゐ』第26巻7月号）。よしたかは、  
かくも千恵を愛していたのか、という感慨をもつ。

その他、「経済調整につきマックアーサー元帥  
及芦田首相へ建言の書を呈す即ち所感」のもと、  
食糧を戦勝国よりめぐまれてざんきに立てる  
慎みもなし  
おのれのみをの利をむさぼりて相共にほろぶる  
道と思はずろかも  
戦争の原始素撲の亢奮を失ひたればあはれな  
りけり  
相ついで前代未聞の悪逆をなす民族の素質恥  
づべし

とあり、戦争と敗戦にともなう凄まじい生活破壊  
の状況が泥沼のように続いていた<sup>(3)</sup>。

「東京裁判」として、

今ぞ神のみ前に立ちていとせめてすがすがと  
して歴史残さむ  
冷厳にまた峻烈に飽くまでも論議つくして恨  
いなかれかし

「清瀬弁護人の最終弁論」として、

没落のきはの忠臣ににてあはれ孤高清節と言  
ふ語おもひつ

とある。よしたかは、この「裁判劇」を一幕物とし  
て詠っているかのように見える。なお、半藤一利  
は、「東京裁判は何であったか」として、①日本の  
現代史を裁く、②復讐の儀式、③日本国民への啓  
蒙教化の目的、と手際よくまとめ、その本質に肉  
迫しようとする<sup>(4)</sup>。

「新宿狂燥曲」として、

へらずぐちたたき振り向くこともせこのばい  
ための無恥が笑ましき  
まつ昼間酒をくらいてわめくなり強いてわい

せつ極まれる唄  
十時から朝までは千五百円よとしゃあしゃあ  
といふ切売りの値を  
色紙買ひたばこ一本くれたるはこころはなは  
だ愉快なるらし  
また買ってやるから来いとぬかせしがよせや  
い誰が度々来るかい  
金の捨て場に困る阿呆のためにとて千五百円  
の肉塊があり  
ひとよさは千五百円とふ肉塊にのこれる夢か  
わが色紙買ふ

とある。この千五百円という値をどのように見るか。当時の家計について、「主人は三十八歳、都内電線工場事務員で、六月ころまで月々私に渡す財布は七千円くらい、この八月になって、私が苦しむのにかめつらをして算段したらしく、千円ふえて八千円くれました。子供は一人で小学校一年生男児、あとは両親（六十二と七十七）です」とある<sup>(5)</sup>。

「六月集」（7～8頁）には、次子の7首が載る。

物価高と打たたかへど一枚の着物も売らずや  
み売りもせず  
悪逆の事件つづきてすさまじやほころびそめ  
し桜見上ぐる  
日ながくも降りつづきたる雨はれて澄む月光  
に会ひかなしも  
あやめ亡きかなしみ言はね雨あとの乙女椿に  
しむるおもひよ  
雨あとの月光すめどわが念ひ徹し切らざる嘆  
きをぞする  
ゆすら梅白き盛りもたちまちにつぶら実とな  
る驚きをする  
帰り来て桜見たりしことのみ思ひ足らひを  
夫に言ひける

ここで、次子は物価高の中の混乱した世相を詠い、急逝した愛児あやめを悲しむ。あやめの病死

は、1947年（昭和22）10月15日のことであり、本編（上）では「回顧三十年」における述懐を紹介した。よしたかは、「僕は長女あやめの出生を見、この子の発育の上に僕の指導もあったが、その願ふところのものが善く表れて来つつあるのをよろこびとしたが八歳で夭折した。僕はこの子のためによりよき父たらん事を欲し、よりよき人間としての完成をこの子のためにも考えた。然しその夢は失はれた」と記し、その悲嘆振りが目に浮かぶ（『最高の価値と最大の幸福』113頁）。

『あぢさゐ』第26巻11月号に、よしたかは「あやめ五週忌」と題して5首を載せる。

おもひではなくさめに似て和ましくあはれお  
もかげやや<sup>はる</sup>杳かなり  
さまよひの果ての寄るべの如くにも追慕の中  
に帰り来にけり  
何をしてすぐせしかなやいつとせはいつはり  
のごと過しすゆめのま  
こぞ筑前博多にことし仙台に命日ちかき秋の  
旅かな  
水のごとき初秋風とつぶやきてにじむ涙よ亡  
き子おもひて

### 3. 台湾回顧

『あぢさゐ』第26巻（1951年〈昭和26〉）の大きな特色として、よしたかは台湾の山岳を三度にわたって詠う。

#### (1) 「新高回顧」

よしたかは、『あぢさゐ』第26巻1月号において、「新高回顧」を高らかに詠いあげる。これは「前奏」4首、「序曲」7首、「主調」29首、「壹章」13首、「二章」9首、「反唱」2首、からなる。まず、これら64首を順次挙げていく。



前奏

治しめすみ国の最も高嶺とぞ行きしおもひを  
えやは忘るる  
新高と富士と互みに相呼ばひ双つたたえて再  
仰がなむ  
秀麗の富士と剛毅き新高の象はいかで思ひ消  
つべき  
元の名のモリソン山とうち仰ぎなつかしみせ  
よ高砂の友

序曲

相つぎて明けゆく嶺々や壮麗の春あけほのの  
天になづなふ  
天つ日はまづ新高の秀を染めて相重ぐ秀つね  
明けわたるなり  
大わだの波なす高ね従へて悠揚毅く臨む新高  
おほどけき天のも中の新高にかしづく嶺呂や  
寄る濤をなす  
あすこそは頂極めむ亢奮に夜霧の月はいづ  
べなるらむ  
禁を犯し雪の新高極めなむ単独行に武者ぶる  
ひつつ  
転勤の日を待ち侘ぶる警官と冷酒あふり楯を  
焚き添ふ

主調

谷襞は互みにふかくいりくみて陳有蘭溪の水  
をかくさふ  
富士標高あたりを埋む宿雪に梅の葉こぼれし  
きたるを踏む  
あかつきの逆光白銀のただ中にか黒き偉圧わ  
れを掴えつ  
朝月の熊笹原の露けだて弾み切つたる軽き心  
身  
雪解水のほとばしりたる岩群はおほひ盡せる  
苔のさみどり  
雪しろを掬べば肺腑にはらわたに沁むる凜冽  
悔いなかりけり

谷窪をいや暗めたる梅ばやし鬱々ししさや厳か  
しきまで  
うばたまのま夜の暗みと思ふまで再生は遼し  
朝山の影  
命かけて高ねにいどむますらをの六根清浄淫  
心を絶つ  
燃ゆる意欲はばまむばかり頂上の偉圧重量感  
天を塞ぎつ  
登攀はたわ易からぬ偉圧にぞいやそそらるる  
挑戦の意気  
刻襲に陰影しるき厳しさをかくてこそ尚もゆ  
る熱情  
直上を試むる息ひた喘ぎひりつく咽喉に雪を  
むさぼる  
けだものの如く雪に喰ひつきピッケル深く雪  
に突き込む  
ずり落ちて雪に埋めば最後ぞよ斜面の雪に  
歩々を確保す  
ここにしてい鳥啼かず雪しろの瀬音さやさ  
や谷にこもらふ  
ひそかにも檜の枝うつる小禽に照りかがやき  
て雪のこぼるる  
まなじりを決し頂上にらみ上げ最短距離直上  
或は不可能  
いただきに天降りし雪を度しみてふふむや遂  
にとげし歓喜に  
雪どけの岩まににほふもろもろの花どきなら  
ぬうらみごちすも  
西東広褰境ふ稜上に突如きびしくあふる気流  
差  
石楠花のうすべににほふ蕾にぞ情容赦もあら  
ず迅風は  
雲うごきそむるすゆの間淡藍をほのめかしむ  
る南支那海  
一葦帯水ヒリツピンあり厦門あり水天あな  
や漂渺として

うつし世は遠き思ひの白日夢阿里山の汽車の  
笛ぞひびかふ

概念にある山容親しもよ大覇ヤボランマボ  
ラスの貌

はるけくは南端の雄大武嶺か全島快晴雲ひら  
もなし

雨にはばまれ雪にはばまれ果さざりし忌々し  
さや遠きシルビヤ

主山より稜三つ股に走せぬれば南北北山東山  
ぞ凝る

### 壹章

深苔のみづく檜原に採らでやは水昌蘭の妖は  
しの花

ほの暗き巨き木立のもとにして幽霊草の透明  
の花

金緑の苔は明るく梅林うづめてすがし雲のさ  
らばふ

梅林金緑色の深苔の木下明るき雪のかたまり  
すは万事ここに休すか水苔の滑岩だたみずり

そめし一瞬

ずりそめて危機のがろえし魔の谷は恐気ふる  
ひて再びは見ず

近距離を心街ひに攀ちたりし軽拳の悔いに臍

咬みにけり

山男自負するものに有るまじき軽拳の愧ぢに  
面ほてるなり

虚空より垂直に下界みるばかりこのすさまじ  
き崩壊の谷

岩にへばりつき見下す谷の峭ちに平然たらず

峯丸ちちかむ

悲惨とも思はず描く想像は四肢飛散せる墜落  
のさま

あしびきの山谷深く白骨と曝れ果てたるもす  
がしかるらん

雪柳さかる峽ちを登り来しきその歩みのあと  
を辿らな

### 二章

大水屈草原の岩塊あらはにて寂寞として澄め  
る天つ日

草原にいくところなす溜り池海獣の瞳の青さ  
にぞ澄む

雷気ふくむ山鳴りいよいよしきりなり夙く  
高度降らざるべからず

わだなかの小舟ならねどひとり行くこの山中  
に方向しらす

隘勇線といふは歴史語の感ありて遺物となり  
し鉄条網のあと

八里四時間快速調のくんだりちや足馳れそめて  
山行きは終ゆ

駐在所あとに稚木の八重桜み山の春のあでを  
盡しつ

健脚をたたえて注がす冷酒に陶々然と色紙を  
ぞ書く

里ちかみ人間のほひなつかしみ高砂族の媼  
と拉れだつ

### 反唱

生きの憂さに思ひくぐもり山行きの回顧にも  
えてかえる青春

山生きを思へば濁みしいのちさへ清純の血の  
かえるふたび

最後に「註」が付され、「隘勇線、台湾蕃地に施行された治安警備線」、「大覇、マボラス、ヤボラン、シルビヤ、何れも高山の名称」、「陳雄蘭溪、河川の名称」、「大水屈、高原の名称」、「モリソン山、新高山のものとの蕃語の名称」とある。

さて、よしたかの新高山登山はいつのことであつたろうか。私の考証では、1944年（昭和19）の秋のことと考えている。何故ならば、『台湾』第6巻第1号（1945年〈昭和20〉1月）に「統浩然行」を載せ、新高主山（現在の玉山）登山とその周辺の山道について詠っているからである（本編（中）-2-参照）。ときに戦局の窮迫するなか、しかも

戦を退いて、よしたかは新高山に挑んだのであった。

新高山について、私がまず想起したことは、その初登頂者が鳥居龍蔵といわれていることである。中蘭英助の『鳥居龍蔵伝—アジアを走破した人類学者—』<sup>(6)</sup>（岩波書店、1995年）を紐解くと、第2章に「新高山の白雪を踏む」が立てられ、その冒頭に「台湾調査の探検記の中で、最も白眉と思われるのは、第四回調査の途上に敢行された、新高山（現在は玉山）登山であろう。暑熱や危険と戦いながら営々とすすめられた人類学や、考古および土俗などの学問的調査と異なり、鳥居が若さにまかせて登頂した爽快さが、読む者の胸をじかに打つからである」とある（岩波現代文庫版、58頁）。

この第四回調査は1900年（明治33）1月～8月の期間にわたって行われた。新高山登山は夏季に行われたとあり、そのルートを鳥居に語らせると、「嘉義にいわゆる阿里山と称する山がある。この山に阿里山蕃と称する蕃族があります。それでちょうど台南から嘉義へ参りましてこれへ参りました」、「それで阿里山蕃を五、六人引き連れ」、「濁水の一支流の上流陳有蘭溪、この川まで行かしました」、「この川の此処に東埔という社がある」となる（『台湾蕃地探検談』『鳥居龍蔵全集』第11巻、朝日新聞社、1976年、426-427頁）。また、鳥居の『ある老学徒の手記』（朝日新聞社、1953年）によると、「私は阿里山中で調査中、一方に高く聳える山を望んだ。これはMorrison Mountain、すなわち、近ごろ命名した新高山であるが、その時私は若気と好奇心に誘われ、忽ちこの山に登ろうとした」、「私は新高山から阿里山草地に下山し、さらに大胆にもここより台湾山脈を横断しようと思ひ、ブヌン蕃の最高居住地に至り、そこからブヌン蕃を案内者として、幾多の困難を冒し、ついに台湾の東海岸、卑南に到着した」とあることか

らも窺い知れる（『鳥居龍蔵全集』第12巻所収、朝日新聞社、1976年、199-200頁）。

よしたかは「雪解水」を飲んだことを詠うように、鳥居も頂上に向かって登り始め「まず植物帯の大いに変化せるを見る。また途中溪水なし、僅かに松樹の幹の凹んだ所に僅かの水溜りのある水を飲んで進み」とある（上掲書、199頁）。

よしたかは梅を詠む。これは鹿野忠雄が新高山登山のときに「男性的なタイワンツガ」、「タイワンツガの大木が、強雨にあおられて、髪をおどろに振り乱す」と描写する（『山と雲と蕃人と—台湾高山紀行—』文遊社、2002年）。本編（中）—その2—にも記したように、この書物は楊南郡が注を付しており、非常に有益な書となっている。

## (2)「大関山」

よしたかが詠む「大関山」は4月号に掲載された。大関山については、次のような説がある。台湾在住の西豊穰は「関山越嶺古道」というブログにおいて、「古道名の関山は、中央山脈南段の雄峰、関山（標高3,668メートル、台湾百岳12号）がもとの由来だと思われませんが、関山という特定の山岳を意味するというより、当時はこの関山から北側の向陽山（標高3,176メートル、百岳17号）まで伸びる、崩壊が激しく著しい起伏を繰り返す稜線は正に天嶮と呼ぶに相応しく、他に二つの台湾百岳である塔関山（標高3,222メートル、百岳72号）と関山嶺山（標高3,176メートル、百岳76号）を含み、これらを総称して大きな自然の関、関山と称していたのではないかと述べている。

ここで、よしたかの歌をあげる。

### 序調

きのふまで原生林を歩み来て<sup>ひろ</sup>濶らに<sup>す</sup>展く素  
裸<sup>はだか</sup>の山  
声はりて血を<sup>ふ</sup>噴くばかり<sup>おら</sup>喚ばむやあけ紫にも  
ゆる山々

ねもごろにいと麗しく彩りて大天地のあけわたるなり  
 感動はすゆにぞ深き沈黙にただただ目守るむらさきの山  
 人間のいだくいくばくの感慨はあざみ笑はむ燃ゆる山々  
 あげほのの紫そむる壮重の大岩塊のまへにひれ伏す  
 夢にだも恋ひし岩山の迫力は幻想超えてここに展けつ

主韻

峻巖のうちにもあなや稜線の峻峭峨々とまさびしくこそ  
 あげほののえび茶色染む岩山の岩ひだは濃き紺青のかげ  
 鋭角の岩ひだひだの陰影はくきやかに深し茄子紺のいろ  
 谷に向ひ落ち集まれる岩ひだの描く奔放の線ぞ逞し  
 触り過ぐる雲の隙にぞ岩光りいよいよ厳しき極みなりけり  
 莊嚴のむらさきの山麻痺感に似たり見惚けてただにま向ふ  
 感動を押し鎮めむにたわ易くたましいは身に即かずありなむ  
 むらさきの濃淡つくる岩ひだは厳かしくして神さぶるなり  
 神々の夜明けなりけり壮重のこの荒山のあげほの色  
 一糸まとはぬ裸形の山の圧倒感隆々としてひた寄するなり  
 頂上に挑まむ意欲つゆもなしこの大観に酔ひ足らふなり  
 わがおもは蒼白となり居つらむか霊消て向ふ  
 あげほのの山  
 息衝しくまもるしづけく速けくはなやぎ淡れ

さびくすみゆく  
 あらかたの山の容を写さむに谷におちゆく線  
 あないづかしも

協唱

背稜を越えなだりたる雲塊はもんどり打つて霧散霧消す  
 見るみるに急奔騰しゆく雲の分水嶺に高く飛散す  
 熱帯の平地に住まふうつし身に雪枯れ原の色ぞなつかし  
 懸崖の瀑のしぶきをくぐり抜け恐れつ渉る剝り堀りの逕  
 季すぎしくまがえさうの枯れ立ちとうやく竜膽花とほしけれ  
 歩み触る蛇のほらずや鬼薊毛脛いとどしく血にまみれたる  
 背稜は吹きしく風のひまをなみ柏楨ひくく岩にすがれり  
 柏楨の古幹白く天日の直たる光り澄みて寂けし  
 ふり仰ぐま澄の空の紺碧の濃さ極まりて手にも染みなむ  
 何十億年の時の悠久きざみたる海底隆起の雲母片岩  
 千年二千年級の巨き檜の立枯れのこごしく遠く晴るる山々  
 石楠花のひとむらの花深谷の紫の陰負ひて艶なる  
 ひととの五葉松品よき枝ぶりを見てのみいく日あかずありなむ  
 美しき五葉松の幹のかなたには裏新高の晴れてはるけし  
 高度まさる新高と雖も豈及かむこの岩山の暗き量感  
 余韻  
 きもの着て踊りし亢奮さめやらずいづべまで

もぞ従きゆかむとふ  
山なかにわれらを迎へきもの着て踊りしことは  
忘らゆまじも  
荷をかつぎ山道あゆむ蕃女らが腰たくましく  
みなぎらふもの  
タヲル振り幾谷曲り別れ惜しむブヌンおとめ  
もあはれ人の子  
いく夜さも待ち伏せ撃ちし猪いのししをかつげるブヌン  
息あえぎつつ  
鹿にげて行くぞ撃て撃てブヌンらが銃ひつさ  
げて追ひすがり行く  
その夜さの山荘の夢は昼のまのスリルにおび  
えうなされにけり  
ここにして怨みはふかしわが友らわきて英彦  
伴はぬこと  
ここにして怨みはふかし神さぶるこの偉いさ  
にいくたりか触る

まず、よしたかは大関山にいつ赴いたのであろうか。よしたかは、『台湾』第3巻第6号（1942年〈昭和17〉6月号）に「大関山越詠」（一）として12首、第3巻第7号（1942年7月号）に「大関山遊草」（二）として9首を寄せていることから、同年の3～4月にかけて走破したものと思われる。

次に、ここで詠われるブヌン族は勇武で知られるが、それは楊南郡が記している（「注」34、鹿野前掲書、367頁）。また、花蓮港庁吉野に生まれた山口政治は「彼らは精悍でなかなか当局の統治に応じず、昭和八、九年頃になって最後に帰順したのもブヌン族だった」と書いている（『知られざる東台湾—湧生が語るもう一つの台湾史—』展転社、2007年、67頁）。

さて、花蓮の詩人・陳黎（1954-）には「ブヌン族の彫像」という詩がある。

カレーの市民を彫刻したロダンが彼らを見て立ちあがるように要求するかどうかはわからない

九人の頑固そうなブヌン族が分駐所の前に並べられ

手足は鎖で繋がれているが、彼らの魂は繋がれていない

もし、大きな斧が彼らの頭を落として石にしてしまったら

彼らの体はなお完全に彫像として自分達の土地の上に

立っていることだろう。今、彼等は審判を待っているところで

統治者の手が彼らを不朽の像にするのを待っている

イカノ社のラマトケンケンと彼の四人の息子ケントウ社のタラムと彼の三人の弟たち、（彼は日本人から脅かされる前に出頭を勧めた母を殺している）

彼らの目は正面を見つめ、面容にはそれぞれ異なる発音の

ブヌン族の言葉で「莊嚴」と彫られている。

莊嚴なる哀愁

莊嚴なる無関心、莊嚴なる自由……彼らは生まれつきの石

これは彼の詩集『華麗島の辺縁』に収められ、上田哲二が訳している（思潮社、2010年、96頁）。また、詩の前に写真が掲載され、「原注」として「この写真は毛利之俊が昭和八年（一九三三年）に出版した『東台湾展望』の中にみえる。昭和七年九月十九日台東庁の里瀧支庁の管内で原住民が大関山駐在所付近檜谷で警察官二名、警丁一名を殺害した事件である。警察は厳しく追尾して、まずケントウ社のタラム、そして十二月十九日に山中で主犯のイカノ社の頭目ラマトケンケン、およびその四人の息子達、タラムの三人の弟を捕らえた。写真の中で九人が裸足で一列に並んでいる」と記されている（前掲書、97頁）。

陳黎が日本の統治時代の痕跡を知らないわけが

ない。それでも、日本歌人たちの花蓮港を詠ったものを『台湾四季一日拠時期台湾短歌選一』（二魚文化事業有限公司、2008年）として編んでいる。その落差をどのように考えるのか。

### (3)「復唱合歓奇萊山縦走」

このテーマについては、本編（上）において、1933年（昭和8）「6月奇萊主山縦走を行う」として、『あぢさゐ』第9巻10月号に掲載の9首のうち3首、26巻6月号【図版2】掲載のうちそれぞれ2首ずつ



#### 【図版2】

第26巻は表紙絵が欠けることが多々あった（2、5、7、9、11月号）。渡辺次子は「後記にかへて」において、「主人よしたかは、一月六日富岡発熊本に向ひました。熊本ではあぢさゐ会員の熱狂な歓迎を受け、歌会も盛大に催した様子です。帰富は三月上旬の予定、したがって又今月号も表紙画がなく申し訳ないと思ひます」と記している（『あぢさゐ』第26巻2月号）。つまり、この当ても表紙画は一冊々々描いていたことがわかる。なお、よしたかの歌会行脚は2ヵ月に及ぶこともあり、その状況については次稿において述べたい。

をあげた。本稿では、後者の歌をすべてあげることにする。

#### 野営第一夜

屈強のタイヤル二十人引具しつ編隊いよいよ  
未踏地に入る  
ふぐりさへ濡れとほるまでのひた雨を衝きて  
ぞ意気は旺んなりけり  
あはれあはれぬれ鼠とぞなり果てて敷きて寝  
るべき鬼萱を刈る  
いとどしき雨もあがれば朝焼のこのさやけさ  
のゆゑに山恋ふ  
頭上には彼の足ありわが脚に彼の頭あり直上  
つづく  
足がかり堀りめぐりつつずり登る雲母片岩そ  
ば立つところ

#### 野営第二夜

熊笹に一間先もわきがたく勘もて泳ぎ先行者  
追ふ  
人間の方向探知の六感かたがはず熊笹をわけ  
て現る

#### 奇萊北峰征頂

いよいよにロッククライミングの峻険のいづ  
くの岩に取りつかむとや  
たのもしや榎氏トップのロップ肩にわれは二  
番のリング巻き締む  
その岩を落すなしかとへばり着き落つけ落つ  
けしかと確保せ  
脚を決して浮すな運動神経の鈍きをはらはら  
しつ励ます  
山に吞まれ腰抜かしたる者ありて征頂断念の  
弱音吐きゐる  
いく日の歩みのあとの谷ひだは重畳濃淡のか  
げなしにけり

#### 野営第三夜

こは熊の足形がたぞ然もけさ踏みしあとぞとタイ  
ヤルのまなこかがやく

今撃ちし鹿の生肉熊笹に刺して楷火にあぶり  
食らふも  
鹿の肉バケツの醤油にひたしてはあぶりくら  
ふも愉快ならずや  
忘らへて常のごとくに振舞へばうすき空気に  
息切れのする  
眠りしキャンプのおのが枕上にうめくはず  
はや猪か熊ぞよ  
山刀おつとりぎまにためらはず組みつかんぞ  
と闇をうかがふ  
山刀逆手に踊りかからむずうめくは熊か五  
メートル先に  
ま闇にぞうごめくものけはひあり聞きとむ  
ればや人間の声  
声きけば片山君ぞ酒をくらひ高山病にまたや  
られたり  
暗紫色に直射にやけし山男顔も口びるもむく  
みあがれる  
軍艦のへさきなしてぞ巨大なる奇菜北峰にあ  
ぐる歓声  
削ぎ落つる直下五千尺の断崖のひだにぞ水の  
湧きてながらふ

雲上樂園

頂上の乾燥しるく熊笹は刈り均らされしみ庭  
さびしつ  
稜上の雪割草にてんぐてふとまりまづめり烈  
風のなか  
岩のまのつつじは細き枝ふりて苔むすまに  
花こまかなり  
鮮かにさみどり芽ぐむ五葉松にぞ適く思ひし  
て射精もよほす  
稜上は塊磊岩くわいらいを打重ねふみしめ難し膝が笑ひ  
て  
鍼をもて刺すばかりにも膝がしら痛めど心ゆ  
く雲の上の花々  
目ざめたるしらじら明けの目の前に踏みしだ

かれて竜膽のはな

この縦走に同行した楨有恒には『わたしの山旅』  
（岩波書店、1968年／『楨有恒全集』Ⅲ所収、五月  
書房、1991年）がある。そこに「台湾での私の登  
山」という節があり、「昭和二年、秩父宮殿下のご  
登山に随行した後、私は塩水港製糖株式会社に勤  
務することになった」とはじまる。そして、「台湾  
島を南北に貫く脊梁山脈の主脈は中央よりやや東  
に寄っている。高度三〇〇〇メートル以上の峰を  
数多く連ねているが、北回帰線以南は全く熱帯的  
で、以北は亜熱帯から暖帯的風土である。気候は  
冬の乾燥期と夏の雨期とに分かれる。この脊梁山  
脈は地殻の褶曲に因るもので、ことに東部の蘇澳  
から花蓮港に至る間約一五〇キロに及ぶ海に直下  
する断崖は比類の少ない雄大なものである。この  
山脈の特色は約二〇〇〇メートル辺から以上の山  
腹が、ヒノキ、ベニヒ、シイ、カシなどの原生林に  
おおわれていることで、阿里山のヒノキは巨木を  
もって知られ嘉義市から森林鉄道が通じていた。  
この常緑樹と針葉樹のつくる森林はまことに見  
事である」と解説している（上掲『全集』Ⅲ、262-  
263頁）。

楨は塩水製糖株式会社に1927年（昭和2）から  
41年（昭和16）まで勤務した。楨は「私は仕事の  
関係上、数多くの登山はできなかったのは当然で  
あるが、それでも総督府の勧めと休暇を利用する  
ことによって二回中央山脈に足を入れた」とある  
ものの、「楨有恒略年譜」には、27年の項に「台湾  
の合歓山、大覇尖塔山に登山する」という記述し  
かない（『全集』Ⅲ所収）。しかし、後続に「ある夏、  
東部の花蓮港から合歓山へ登った」とあり（『全集』  
Ⅲ、264頁）、これがよしたかが同行した33年の  
縦走であろう。

さて、楨とよしたかの縦走の状況を、楨は「タツ  
キリ溪を遡って中央山脈に至るのであるが、こ  
の溪流の浸食によってできた谷は、足下に約

二〇〇〇メートルの断崖をなしている。合歡山の東面は広い茅原である。この茅原を歩きながら尾根の上に遠望した樹木の大きさから推測した距離は、いつも予想を外れて遠かった。それは尾根に見た樹木が、我が国の山岳で見慣れたものとは桁外れに大きいため起こした錯覚であった。台湾の原生林に巨木の多いのは壯観である」と記している。また、楨は「荷を高砂族に背負わせての旅であるが、露营地についてから獵銃を与えて狩獵に出してやると、私達二日間の行程を縦横に駆け回って来る。キョンという鹿のような動物を下げて来たが、その駿足には驚いたのであった。また途中、全山が山火事でヒノキ林が立ち枯れになっているのを見た。この膨大な山火事は高砂族が、キョンを追い出すために焼いたものだ<sup>もつくいけい</sup>と聞いた」、「帰途は木瓜溪を下ったが、この溪谷の天上断崖もタロコ峽と同様に深いものであった。森林地帯に入ると樹冠は高く日光を遮り、無数の蔦が垂れ下がっている。中にはあの細い蔦が地上からまっすぐに立って樹枝を求めているものもある。また樹木には寄生蘭もあった」とも描写している（『全集』Ⅲ、265頁）。

最後に、楨が「花蓮港の平地から西に望む中央山脈の壯観は忘れることができない。合歡山など三六〇〇メートルを越える連山が、数条の雲の帯をまとうてそびえる姿は雄大である」と書き留めていることを紹介しておきたい（『全集』Ⅲ、265-266頁）。

以上、楨の回顧録はよしたかの歌についての絶好の解説といえる。

## おわりに

本稿は、遺憾ながら1946年から1951年までしか対象にできなかった。しかも49～50年度刊行の『あぢさゐ』は未発見という状況である。また、

よしたかの「台湾回顧」にも十分に解説を加えず、慚愧にたえない次第である。

なお、よしたかには『新しい短歌とその作りかた』（あぢさゐ社、1949年）という短歌論、文芸論がある【図版3】。これについては、よしたかの短歌論を一編にまとめるときに紹介したい。



【図版3】  
この書は頼衍宏氏より影印本をご恵贈賜った。ここに記して謝意を表したい。



註

(1) 渡辺よしたかの遺族も、『あぢさゐ』昭和24～25年発行のものは所持していない。

(2) 五木寛之が上京時に神社の床下に寝たことを思い出す。五木は次のように回顧する。

九州から上京し、まず早稲田に行きました。文学部の建物の、地下に入って行く階段に屋根があって、そこなら雨露をしのげるので、しばらく仮の宿としてお世話になろうかなと甘いことを考えていたら、警備員の人に見つかって叱られてしまいました。

それで大学近くに穴八幡あなはちまんという神社を見つけて、申し訳ないと思っただけけれど、社殿ゆかしだの床下に入り込んで、少ししけた慢幕まんまくの間に九州から持ってきた軍用毛布を敷いて、最初の晩はそこで寝ました。

いまでいうとホームレスですよ。友だちに「どこに住んでるんだ」と聞かれて、「穴八幡の床下に泊まっているんだよ」と言ったら、みんな笑っていました。それでもそのことで、さほどびっくりする人がいないという時代でした。

（『わが人生の歌がたり一昭和の哀歓一』角川書店〈文庫版〉、2011年、221頁）

これは1952年（昭和27）のことである。

(3) 1945年の状況として、木坂順一郎は「政府によれば、住宅は空襲による焼失、建物疎開による取壊し、戦時中の補充不足分、海外からの引揚者の必要分を加えると四二〇万戸が不足していると推定され、食糧は一九四五年度産米が大凶作となったため、国民の一日の摂取量は四五年の平均一七八二カロリーから四六年には一三二五カロリーに落ちこんだ」、「軍需物資の不正流出や臨時軍事費の支払いによる通貨の急膨張、極端な物資不足などによってインフレが急激に進行しただけでなく、敗戦から十月中旬までのあいだに四〇〇万名以上の人が職を失い、これに復員軍人と海外引揚者をふくめると失業者は一三〇〇万名以上のぼったといわれていた。多くの民衆は、毎日の生活をやっと維持するありさまであった」と述べる（『占領と憲法第九条』『十五年戦争史』第4巻、青木書店、1989年、17頁）。

なお、芦田均について、下村湖人は芦田が国立

大学の授業料値上げに反対する東大の学生に対して、「人類最大の発明は、地球が冷えきった時に、交通機関を発明して他の星に移ることだ。天体の運行を眺め、さうした発明に心を労していると、授業料の問題などただちに解決する。千円や二千円の値上げが一たい何だ」と発言したことを引きつつ、「私は、芦田氏が真に道徳的責任を感じて内閣を投げ出したものならば、悩める学生たちに大宇宙を見よなどという偉そうなことは第一いえなかったであろうと思う」と紙幅を費やして批判している（『新風土便り』『新風土』昭和23年12月号、『下村湖人全集』第8巻、池田書店、1965年、357-360頁）。

(4) 東京裁判については、半藤一利の『昭和史一戦後篇 1945-1989—』（平凡社、2006年）が面白い。

(5) 原田勝正『昭和の世相』（『昭和の歴史』別巻、小学館、1983年）157頁。

(6) 藤井志津枝『理蕃—日本治理台湾的計策—』（文英堂出版社〈台北〉、1997年）は未見、青木説三『遙かなるとき—先住民社会に生きたある日本人警察官の記録—』（関西図書出版、2002年）参照。

(7) 中蘭英助は、鳥居が新高山登頂に成功して短歌を詠んだことを紹介し、

異国コトクニに山と云ふ山はさはにあれど いても尊  
き山は此の山

山霊への奉納歌といっているが、鳥居が白雪におおわれた中央の山上に初登頂して考えたことは、むしろ新高山麓に散らばる先住民各種族の運命だったのではないか。けっして彼らの死ではなくて永遠なる生についてであるが。（前掲書、61頁）と所感を述べている。含蓄のある一文である。

〔付記1〕岐阜聖徳学園大学教授・中島利郎先生からは、本編（上）について、懇切丁寧なご教示を賜った。以下、具体的に訂正し、先生に深甚なる謝意を表したい。

① 41頁左下行：『文芸台湾』を「台湾文学奉公会『台湾文芸』」に訂正。

中島先生は「『文芸台湾』は、西川満が発意し実質的には創刊した（ただし初期は台湾文芸家協会の機関誌）文芸誌。戦争末期、それと張文環主宰の文芸誌『台湾文学』（中心は台湾人作家）が統制により、台湾文学奉公会発行の『文芸台湾』に集約されました。尚、この他にも過去に台湾人主体の同名誌『台湾文芸』という文

芸誌がありましたので、台湾文芸奉公会という発行所をつけたほうが誤解が生じないと思いました」とご指摘いただいた。

② 49 頁左最下行：「尾崎秀真は著名な考古学者・民俗学者であり、『文芸台湾』の同人～」について、「新聞記者・歴史家で『文芸台湾』の同人ではありません。よしたかも関係した歌誌『台湾』の創刊にはかかわっていますが」とご説明いただいた。

〔付記2〕 2011 年度、9 月には花蓮県文化局から招聘していただき、陳黎・上田哲二・李進益・鍾淑敏・王惠珍の諸先生にお世話になった。これは「第六屆花蓮文学研討会」として、「溯源与奔流—花蓮文学百年」のテーマのもと開催された。12 月には沈美雪先生（中国文化大学）、3 月には王惠珍先生に再度お世話になった。改めて御礼を申し上げます。

〔付記3〕 本稿は『あぢさゐ』第26巻を考察の対象とした。しかし、渡辺よしたか氏のご遺族も2月号を欠いていた。偶々、次のような経緯で入手することができた。

戦後、『あぢさゐ』の群馬県群馬郡箕輪支部を狩野みち氏という方が取りまとめていた。みち氏のご子息は守氏といい、二科会の著名な油絵画家であった。その守氏の夫人をヒデ氏といい、『あぢさゐ』の会員であった。この3月に、私は『あぢさゐ』の昭和20年代の歌を調べていて、「箕輪 丸山マサ江」の「二人目の母とならむ日も遠からず胸の鼓動の静かに高し」、「吾子生れむ日を数えつつ針はこぶ白き衣に春ふくむ風」に出会った。私の母・野口愛子は既に亡いが、女学校時代に丸山マサ江という同級生がいて、その長男・丸山博氏（元群馬県立高等学校教員）と私は高校が同級であった。私は『あぢさゐ』の探索のために、彼に40余年ぶりに連絡を取り、丸山マサ江氏から狩野ヒデ氏に繋がり、未発見の『あぢさゐ』昭和26年2月号を手にすることができたのであった。私の『あぢさゐ』探索の旅も緒に就いたばかりである。

上記の諸氏にも心より御礼申し上げます。

渡辺よしたかの戦後詠（1946～1951）をめぐって

On the *Tanka* Poetry of Yoshitaka Watanabe after World War II (1946~1951)  
*Tanka* Poet Yoshitaka Watanabe : His life and literary works (Part 4)

NOGUCHI Shuichi

**[key words]**

Taiwan, the repatriation, the revised publication of *Ajisai*, Niitakayama, Daikanzan, Gokan-Kiraisan